

漱石はなぜ「倫敦消息」を書き直したのか

Abstract

安藤 文人

はじめに

知られている通り、夏目漱石の「倫敦消息」には二つのヴァージョンがある。ひとつは一九〇一年（明治三十四）、「ホトトギス」第四卷第八号（五月発行）および第九号（六月発行）に掲載され、ひとつはそれから十四年後、一九一五年（大正四）に新潮社より刊行された文集『色鳥』に収められた。前者「ホトトギス」所収版はその年の四月九日、二十日、二十六日付で正岡子規と高浜虚子に宛てられた三通の書簡をほぼそのまま誌上に転じたもので、その後虚子の編集した単行本『写生文集』（俳書堂、一九〇三）、さらに最初の全集の第一〇巻（初期の文章及詩歌俳句、一九一八）にも改稿なく収められた。一般に「倫敦消息」と言えば、この「ホトトギス」版を指す。一方、漱石自身に大幅な改筆を得た『色鳥』所収版は、一九九四年、新たな岩波版漱石全集に「ホトトギス」所収版と並べて収められるまで、一般の読者の眼からは長く遠ざけられることとなった。「天下後世の定本」²たることをめざし断簡零墨まで集めようとする岩波書店版「漱石全集」から漏れたことよって、その間『色鳥』版はいわば「外典」の立場にとどめ置かれたのである。

ただし、二つの版がこのような布置に留まることが漱石の意志にかなっていただかどうかは別の問題である。たとえば漱石の高弟で最初の全集から編纂に加わった小宮豊隆は、「ホトトギス」版を収めた巻の「解説」³において、「漱石は、是（引用者注「ホトトギス」所収版）を昔のままの形で公けにする事を欲せず、その（一）を全然削除し、（二）と（三）とは保存するにはしたが、

ほとんど旧態を止めないやうに、全体に大斧削を加へた」と述べている。「大斧削」というのは決して大げさではない。実際この『色鳥』版を「ホトトギス」版と突きあわせてみると、単に大幅な削除がなされているばかりか、次のように、同じ事柄を記しても文章のうえで細かな書き換えがなされていることがわかる。

然しながら冬の夜のヒュー／＼風が吹く時にストーヴから烟りが逆戻りをして室の中が真黒に一面に燦るときや窓と戸の隙間から寒い風が遠慮なく這込んで股から腰のあたりがたまらなく冷たい時や板張の椅子が堅くつて疝気持の尻の様に痛くなるときや自分の着て居る着物が漸々変色して来るにつれて自分が段々下落する様な情ない心持する時は何の為にこんな切り詰めた生活をするんだらうと思ふ事もある。

（「ホトトギス」版）

然し冬のヒュー／＼風が吹く晩に暖炉から烟が逆戻りをして室の中間一面真黒に燦る時や、窓と戸の隙間から其寒い風が遠慮なく這ひ込んで来て、股から腰のあたりを堪らなく冷たくする時や、板張の椅子が堅いので尻が疝気持見たやうに痛くなる時や、自分の着てある着物が漸々変色して来るにつれて、自分が段々下落する様な情ない心持になる時は、必竟何の為にこんな切り詰めた生活をするんだらうと自分で自分を疑つて見たくなる事もある。

（『色鳥』版）

末尾で語り手自身の心情をやや詳しく言い換えている点を除けば、『色鳥』版に新たに足された事実内容はなく、用いられている語すらほぼ同様であるが、それでいて助詞や語順に細かい変更が加えられており、読点まで含めれば一行としてそのまま残された部分はない。小宮が「ほとんど旧態を止めない」としたとおりである。ここから容易に推測できるのは、漱石は十四年前にロンドンから書き送った文章について、加筆修正を行うよりは、それを見ながら、新たな文章として書き直したのであろう、ということである。筆者は未見ながら、『色鳥』版「倫敦消息」のまとまった「原稿」が現存するという事実はその傍証たり得るかもしれない。

では、なぜ漱石は「倫敦消息」についてこのように徹底した改筆、書き直しを行ったのか。

この問いかけは、漱石に関しては特段の意味を持つだろう。全集の校異表を見ても明らかのように、漱石作品では原稿と新聞連載、単行本などテクスト間の異同がほぼ誤字の訂正や送り仮名等文字遣いの変更に限られている。

漱石は過去の自作に手を入れない作家だった。小宮豊隆も「解説」で「元来漱石は、自分が筆を下すまでの間は、書かうとする事を練りに練るが、それを書いてしまふや否や、もうそれを見向くのも厭だといふやうな作家であつた」し、「そんな事をして時間と精力とを費やすほどなら、自分は新しいものに手を著けるといふのが、漱石の主義であつた」と断定的に述べる。漱石自身の発言にそのような「主義」を表すものはないが、「倫敦消息」以外に大幅な改稿の例がないという事実そのものが、これを裏付けているだろう。

ただし、そこからの小宮の説明はやや説得力を欠く。小宮は漱石が一九一五年（大正四）に読者に宛てた書簡から「今から回顧してみると芸術的な意味で全然書き直したいものが沢山あります。けれども其恥は芸術上の恥で徳義上の恥でないからまあ我慢してゐるのですあなたから色々云はれると甚だ勿体ない気がします」というくだりを引いて、「かういふ心持がたまたま「倫敦消息」に触発して、それまでの主義に反し、漱石をして斧削の拳に出でしめたものに相違ない」と理由を付けている。しかし、『色鳥』の構成と出版

の経緯を見ると、いかにも不十分な感は否めない。

『色鳥』は、编者（中村武羅夫であろう）の「後記」によれば「夏目漱石先生の全作中から、その最も代表的なものを選び、是を歴史的に編纂したものの」（『色鳥』について―编者記⁵）であり、「倫敦消息」や『カーライル博物館』、『一夜』と言った初期の小編から、『我輩は猫である』⁶、『三』、『彼岸過迄』の「雨の降る日」、『心』から「先生と遺書」など長編の一部、さらに『思い出す事など』『硝子戸の中』といった随筆まで、執筆時期においても作品ジャンルにおいてもバランスの良い選択がなされているが、この中でわずかながらでも漱石による書き換えが認められるのは「倫敦消息」一編に限られている。

もちろん『色鳥』出版の前年に書かれた『ころ』や同じ年に発表されたばかりの『硝子戸の中』は別にしても、小宮の推測にしたがって「全然書き直したいものが沢山あります」という漱石の「心持がたまたま」触発したのであれば、『猫』や、また平行して書かれた『カーライル博物館』、『一夜』などについてもいくらかの加筆修正が行われても良かったのではないか。

さらに、『色鳥』编者は同じ後記において以下のように「倫敦消息」の収録について述べているが、改稿についての言及は一切ない。

◎巻頭に収めた「倫敦消息」は、作者が英国に留学中、正岡子規に宛て、書いた通信で、雑誌「ホトトギス」（明治三十七年⁷）に載せられたものだが、その当時は一向人の注意を惹かなかつたし、且つ作者が何の集にも入つてゐない為め、未だ広く知らるゝに至らなかつた。今此久しく埋もれたる宝石を発掘して本書の巻頭に光彩を添ふるを得たのは、编者の深く喜びとするところである。

もしこの後記の述べる通り「広く知らるゝに至らなかつた」「久しく埋もれたる宝石」である「倫敦消息」を「発掘」することが编者の狙いであったならば、むしろ「ホトトギス」掲載の文章を（他の収録作品と同様に）そのまま、語句を変えずに採録するほうがその目的にはかなつたはずである。ここから、『色鳥』版への改稿が编者よりも漱石自身の意思によるものである

ことが推察できる。もし「倫敦消息」の改稿が編者の希望によるものであったとしたら、編者後記は先の引用とは姿を変えたものになっていただろうし、また逆に「ほとんど旧態を止めないやう」（小宮豊隆）な改稿を新たに漱石から得たならば、編集者としてはむしろそれを宣伝した方が得策だったのではないだろうか。しかし、九月二十八日付大阪毎日新聞「新刊雑書」欄、十月二十四日付大阪朝日新聞夕刊「新刊紹介」欄、「文章世界」十一月号「新刊紹介」欄における『色鳥』紹介を見ても、所収の「倫敦消息」が漱石によって大幅に改稿されたものである点に触れたものはない。それどころか編者は「後記」の末尾で「◎本書を選むに当り、作者は取捨のすべてを編者に一任せられたので、選者は其の寛容に甘へて甚だしく私意を恣にした」とまで述べ、むしろ漱石の不干渉を印象付けている。少なくとも『色鳥』の読者の大半は、集中の「倫敦消息」が、編者自身のいわゆる「久しく埋もれたる寶石」である「ホトトギス」版とは大きく姿を変えたものであることを知らずに読んだであろうし、編者も、また漱石も敢えてそれを伝えようとはしなかったのである。

このような事情に注目するならば、「倫敦消息」の『色鳥』版への改稿が「心持がたまたま」触れたというような偶発的な動機に基づいたとは思われない。編者に作品の選択を一旦委ねながらも、そこに「倫敦消息」が含まれると知った漱石は、「主義」を枉げても大幅な改筆、全面的な書き直しを施さざるを得なかった。編者の要請がなくとも、またその事実を世に謳う意図がなくとも、漱石には改稿する必要があったのである。

一、小宮豊隆の「説明」

その「必要」について小宮豊隆の「解説」は次のように説明している。

「倫敦消息」初稿で漱石が、あたるにまかせて薙ぎ倒すやうに、その才筆を縦横に振り廻してある事は、疑はるべくもない。恰もその話が、後の漱石には、軽薄にも厭味にも見えただけではないかと思はれる。然し此所には、過去の漱石の持つてゐた良いものと悪いものが、引き離す

漱石はなぜ「倫敦消息」を書き直したのか

ことの出来ない程度に、絡み合つて現はれてゐるのである。もしその、軽薄に見え厭味に見えるものを削り去るならば、それとともに良いものも亦削り去られ、全體はその生彩をぬぎとられて、藻ぬけの殻のやうなものになつてしまふに違ひない。それに気がつかない漱石ではない筈である。気がついてゐてもなほ漱石が、敢えていろんなものを削除して顧みなかつた所以のものは、苟もそれを公けにする以上は、現在の眼から見て、我慢が出来る程度のものでなければならぬ、我慢が出来る程度のものでする為に、例へばそれに付随してゐた生彩を減殺するとしても、それは已むを得ない事であるといふ、漱石の、はつきりした考へ方から来てゐるのだらうと思ふ。

先行研究を見るならば、「倫敦消息」を論じて『色鳥』版に言及することはあつても、改稿の「理由」自体を論題に据えたものは、それが漱石の創作活動で唯一の例であつたことを考量すれば、決して多いとは言えない。ここに、この小宮解説の影響力を捉える事もできるだろう。しかし、つぶさに見てみよう。ここで小宮は、「ホトトギス」版「倫敦消息」に対する漱石の（四年後の）評価を改稿の動機としながらも、そのような評価の存在については何ら根拠を示してはいないのである。「倫敦消息」初稿、つまり「ホトトギス」版における自身の才筆ぶりが後年の漱石には「軽薄にも厭味にも見えただ」という点も、また、その部分を削り取ると「全体はその生彩をぬぎとられ」としてしまうと考へた点も、それぞれ「ではないかと思はれ」、「それに気づかない漱石ではない筈である」（傍点ともに引用者）という文言が続く事から分かるように結局は小宮豊隆の推測にすぎない。さらに、小宮はそのような「推測」を根拠として、「苟もそれを公けにする以上は、現在の眼から見て、我慢が出来る程度」のものにするために、たとえそれに付随する「生彩を減殺する」犠牲を払つても、「軽薄にも見え厭味に見えるもの」をやむを得ず削除せざるを得ないという漱石の「はつきりした考へ方」を示すが、それも最後まで読むと「だらうと思ふ」というもうひとつの「推測」でしかないことが分かる。ここには、漱石自身の声としての確実な「倫敦消息」評は何も

示されていない。もつと有体に言えば、ここに漱石の評であるかのように装って書かれているものは、実は小宮豊隆自身の「倫敦消息」評であるかもしれないのだ。

もつとも、漱石の改稿を経た『色鳥』版「倫敦消息」が「ホトトギス」版に比べて生彩を欠くと見たのは、小宮ひとりではない。知る限りこの二つのヴァージョンについて最初に言及したのは、森田草平による「「倫敦消息」と『自転車日記』(『文章道と漱石先生』⁷⁾所収)だが、森田はそこで「ホトトギス」版を「純然たる私信であつて、公衆を眼の前に置いて筆を執られたものでない。が、それだけにまた先生の面目が躍如として出て居る」と評する一方、『色鳥』版については、「後で筆を加へられた方は、調つては居るけれども、何も興味が索然として、やはり手紙の儘の方が良い」と述べている。小宮が漱石自身の評価(への推測)として語っている事柄を森田は自己の評として明確に語っているわけだが、全集の編纂者でもあった二人の弟子が、『色鳥』版について「生彩をぬきとられて」や「興味が索然として」などと同様の言葉で否定的な評価を与えている点には注目せざるを得ない。

単純に考えても、小宮の言うような「はつきりした考へ方」つまり「ホトトギス」版「倫敦消息」が漱石の「現在の眼」から見れば我慢できないという自己批評に基づいて改稿されたのであれば、その高弟である小宮や森田が、改稿された『色鳥』版ではなく「ホトトギス」版の方を全集に入れたのは奇妙なことである。もちろんこの場合は、「初期の文章」のひとつとして収められたものであり、これは、全集の予約募集広告にもうたうように「吾輩は猫である」以前の文章を採録して先生が燦爛たる文学的生活の淵源を示す」ために設けられたカテゴリだから、一応名目はついている。従つて、これも推測でしかないが、小宮やあるいは森田は、漱石の改稿によつて失われてしまった「生彩」や「面目」を惜しんで「初期の文章」に「ホトトギス」版を入れ、同時に『色鳥』版を「正典」たる全集からは排除したのかもしれない。

しかし、このように推測を重ねても、結局『色鳥』版で漱石が全面的な改稿を試みた理由、目的に至ることはできないだろう。小宮のストーリーに従

うならば、漱石は『色鳥』への採録によつて「苟もそれを公けにする以上は」、「ホトトギス」版の生彩を犠牲にしても「軽薄」や「厭味」に見える部分を削除したことになるが、これは小宮自身が「解説」で引いた漱石の手紙に即して言えば、結局「徳義上の恥」を「芸術上の恥」よりも優先したことにはならないだろうか。⁸⁾そしてその結果、たとえば森田に「興味が索然として」と評されるような、また弟子たちを編者とする「全集」にも採られないような改稿作品をなした、ということにはならないだろうか。

二、削除と「小説化」

『色鳥』版における漱石の改稿は、テキストに加えた変更の性格から、大きく三種類に分けることができる。第一に漱石は、三章からなる「倫敦消息」のうち四月九日付書簡に基づく「一」をすべて削除した。したがつて『色鳥』所収の「倫敦消息」は題名のあとに「明治〇〇年正岡子規宛にて送りたる書信」と書き添えながらも唐突に「二」から始まっている。⁹⁾さらに、残された「二」と「三」についても、特に「二」の前半を中心にして部分的な削除が相当箇所行われている。これを第二点とするならば、第三の変更点は、本稿のはじめですでに例示したような、文章全体に及ぶ「書き直し」である。記述内容(事実)は変えず、名詞や形容表現もできるだけ「ホトトギス」版に沿いながら、しかし全く同じ文が二つ続くことすらないほどの書き換えが行われている。佐藤泰正や長島裕子¹⁰⁾は「ホトトギス」版において専ら用いられていた「我輩」という語り手の自称が、『色鳥』版においてはすべて「僕」に変更されている点を指摘しているが、このように徹底した変更も、全面的な書き直しに伴つて現れたものと考えてよいだろう。

もし漱石の改稿に明確な意図があつたとするならば、「二」の全面的削除、「二」「三」における部分的削除、そして同箇所の全面的書き直し、という異なるレベルの変更が、それぞれ同様の効果をテキストに与えていなければならぬ。たとえば全面的に削除された「一」と、「二」「三」の削除部分との間になんらかの共通性が認められるならば、そこから改稿の動機を推し量ることができよう。小宮豊隆に従えば、それこそが「軽薄に見え厭味に見

えるもの」であり、かつそれをぬきとると全体が「藻ぬけの殻のやうなもの」になつてしまふ」やうな「生彩」だということになる。

ただし、「一」の削除について言えば、小宮説の根拠を推し量るまでもないかもしれない。「二」「三」が連続して同一の話を伝えているのに対して、「一」は明らかにそれとは異なる内容を持つ：というべきか、何ら一貫した内容と呼べるやうなものを持たないからである。たとえば「一」の冒頭で漱石は「日本の将来の問題」という構えの大きな話を始めながらも、しばらくすると「然しこんな事は只英国へ来てから余慶に感ずる様になつた迄でちつとも英国と関係のない話だし君等に聞せる必要もなし聞き度事でもなからう」とそれを放棄する。しかし、だからと言って別に用意した話題があるわけでもない。前の話題を「先ぬきとして何か話さう、何がいゝか話さうとすると出ないものでね困るな」と、自ら話題に窮していることを話題にし、揚句に「仕方がないから今日起きてから今手紙をかいて居る迄の出来事を「ほととぎす」で募集する日記体でかいて御目かけ様」と述べる。しかしその「出来事」にしても「風来山人の生活だから面白可笑しい事はない頗る平凡な物」でしかない。実際、そこから「日記体」で記述される朝からの行動の記述は、「ホトトギス」の日記募集の課題に則つた「漱石の一日記事」であり、ロンドンの下宿における朝の目覚めから身支度、朝食後に新聞を読んてから外出し、「地下電気（地下鉄）」で市中に向かう途中まで自身の行動を逐一描き出している。漱石はその末尾で車中の様子に触れ「平凡な乗合だ。少しも小説にならない。」と締めくくっているが、それはそのまま記事全体にも当てはまるだろう。もちろん漱石の目的は子規や虚子に対して己の生活を報告することにあるのだから、もとよりそこに小説的な展開を求めても仕方がないのだが、しかし漱石はこの一日記事すらも中絶し、幾分投げやりにも聞こえるやうな弁解で書簡を閉じてしまうのだ。

（もう厭になつたから是で御免蒙る。実は僕の先生の話しをし度のだがね。余程奇人で面白いのだから。然し少々頭がいたいから是で御勘弁を願はう）四月九日夜。

漱石はなぜ「倫敦消息」を書き直したのか

念の入つたことには、この末尾で漱石が触れた「余程奇人で面白い」「僕の先生の話し」も、その後取り上げられることはない。つまり、「倫敦消息」の「一」は漱石の意見開陳であれ、行動記録であれ、また人物譚であれ、すべて中絶、あるいは先延ばしにされてまともでない、いわば端切れの話の集合にすぎないのである。

しかし、それは「一」が書簡文として「失敗」であつた、ということを決して意味しないだろう。書簡という言葉には、書字による通信手段（メディア）という意味と、その通信内容（メッセージ）という二通りの意味があるが、後者の「メッセージ」についてはその内容に何の制約もない。書簡文とは「何を書いて良い」ジャンルであつて、さらに言えば「一」のように話の断片が寄せ集められているだけでも、一向に構わない場合すらある。この四月九日付書簡はまさにその典型で、「ホトトギス」掲載の折に省略された冒頭部で漱石は「時々は見た事聞た事を君等に報道する義務がある」と述べながらもその理由として「是は単に君の病気を慰める許りでなく虚子君に何でもいからかいて送つて呉れると」頼まれて請け合つたことしかあげていない。「一」において漱石がその義務を十分果たしたことは、子規と虚子がそれを喜んで「ホトトギス」に掲載した事実自体がよく示しているだろう。

しかし、結局果たされなかつたものの、「一」の末尾で「実は僕の先生の話しをし度のだがね」と予告しているように、漱石にはもう少しまとまつた話をしようという気持ちもあつたのだろう。続く「二」では、冒頭から倫敦の下宿について語り始め、気晴らしに行う散歩での体験とそれから戻つて寝るまでに抱く現在の生活と未来への思いを述べたうえで、次のように話を改める。

かゝる有様で此薄暗い汚苦しい有名なカンバーウエルと云ふ貧乏町の隣町に昨年の末から今日迄居つたのである。居つたのみならず此先も留学期限のきれる迄は此処に居つたかも知れぬのである。然るに茲に或る出来事が起つていくら居りたくつても退去せねばならぬ事となつたといふ

と何か小説的だが其訳を聞くと頗る平凡さ。世の中の出来事の大半は皆平凡な物だから仕方がない。

これを逆から言えば、漱石はここで「頗る平凡」な出来事について「然るに茲に或る出来事が起つて」と「何か小説的」に語り出そうとしていることになる。この後「二」の記述は、「出来事」の舞台であるカンバーウエルの下宿から離れない。寄宿していた下宿屋一家自体が家賃を滞納して転居（夜逃げ？）することとなり、唯一の下宿人たる漱石が懇望されて結局ともに転居することを決心するまでの経緯が、ひとつの筋に沿って語られる。実際この「出来事」は進行形で漱石の身に起きつつあることなのだが、それを描く筆致は物語としての統一性をよく保って他に逸れることもなく、最後の段落では「運命の車は容赦なく廻転しつゝある。我輩の前及彼等二人の前には如何なる出来事が横はりつゝあるか」と、まるで結末を知ったうえで読者の興味をそそろうとしているようなくだりまで現れる。仮に漱石に従って「出来事」自体は平凡だとしても、その語り方は十分に「小説的」なのだ。

さらに、「二」から六日を置いて書かれた「三」では、その間の「出来事」の進展が伝えられる。「下女」にして「朋友」たるペンから、現在の借家からの転居を巡る差配人とのトラブルが伝えられ、翌二十五日（つまり書簡を書く前日）朝になると下宿屋の主人から、差し押さえを逃れてすでに荷物を移した旨が知らされる。続いて「我輩」自身が荷物を両手に「神さん」と鉄道馬車で新宅まで引越す有り様が記述され、最後はまさしくその新たな部屋で手紙を書いている現在に接続するのだろうか、「門前を通る車は一台もない。往來の人も声もしない。頗る寂寥なるものだ」と様子を伝え、ペンが解雇されてしまったことを告げてこの「出来事」の語りは閉じられる。「三」の内容は「我輩の前及彼等二人の前には如何なる出来事が横はりつゝあるか」という「二」末尾の問いかけに良く答えて、二つの章に連続性と一体性を与えている。また「三」のみを取り出しても、ペンの紹介で始まり、その解雇を惜しむ言葉で終わることで「話」としての完結性が高められていると言っても良いだろう。

このように、「ホトトギス」版の三つの章を比較すれば、「一」と「二」「三」の差異は際立っている。石崎等の指摘を引けば、「二」や「三」になると様相が異なり、「漱石の筆はイギリス人との「小説的な」人事交流を描くところに主眼が置かれるようになる」⁽¹²⁾。したがって小宮のように、軽薄や厭味、というような鑑賞的、あるいは質的なレベルにまで立ち入らずとも、『色鳥』版での「一」の全面的な削除にはよりわかりやすい理由付けが可能になるだろう。つまり、単純に漱石は、『色鳥』版において同じひとつの出来事を伝える「二」「三」のみを残すことで、「倫敦消息」を「物語化」、あるいは「小説化」しようとしたのではないか、という見方である。

例えば久泉伸世は、『ホトトギス』版では、観察者としての彼が見聞きした事実が単に羅列してあったのだが、『色鳥』版ではそこで述べられた「諸事実が、当時のロンドン生活に対する漱石自身の十四年後の視点を軸として、緻密な構造を形成している」と述べる⁽¹³⁾。体験から時間的に隔たることによって、その距離が、出来事全体の構造的な把握を可能にした、ということだろう。従って、即時的な「観察」を記録する「日記」であった「ホトトギス」版に対して、

構造を意識して書き直された『色鳥』版「倫敦消息」は、もはや書簡の範疇に入るものではなく、むしろフィクション、すなわち一篇の小説とも見なせる。これが、新「倫敦消息」の「独自性」なのである。

この、「ホトトギス」版と『色鳥』版の間で書簡から小説へのジャンル変換がなされた、という久泉の見解には全面的に賛成したい。しかし、久泉自身が続けて「むろん、漱石が『倫敦消息』への加筆を行った時、それを小説にするつもりでいたと断言することはできない」と述べているとおり、このジャンル変換、「小説化」そのものが改稿の動機であったのか、それとも語り直しを図る中で必然的に導かれた結果であるのか、という点についてはまだ留保の必要はあるだろう。そして仮に後者であるならば、漱石の改稿について、なお別の動機が得られなければならない。

三、関係の中の語り

もちろん、漱石による「小説化」そのものについては、第二の種類、つまり「二」以降における部分的削除においても十分に確認できる。たとえば「二」の冒頭から見ると、本論で最初に引用した「然し冬のヒューヒュー風が吹く晩に暖炉から烟が逆戻りをして……」という同様の部分にいたるまでの記述は、全集で数えて「ホトトギス」版で二十二行あったものが、『色鳥』版ではちょうど半分、十一行に削られている。

「ホトトギス」版

又「ホト、ギス」が届いたから出直して一席伺はう。我輩の下宿の体裁は前回申し述べた如く頗る憐れつぽい始末だが、そういふ境界に澄まし返つて三十代の顔子然として居られるかと君方は屹度聞くに違ひない。聞かなくつても聞く事にしないと此方が都合だから先づ聞くと認める、処で我輩が君等に答へるんだ懸念のない所を答へるんだから其積りで聞かなくつては行けない。

我輩も時には禅坊主見た様な変哲学者の様な悟り済した事も云つて見ることが矢張大体の処が御存じの如き俗物だからこんな窮窟な暮しをして回や其樂をあらためず賢なるかなと褒められる権利は毛頭ないのだよ、そんならなぜもつと愉快な所へ移らないかと云ふかも知れないが其処に大に理由の存するあり焉さ、先聞き給へ成程留学生の学資は御話しにならない位少ない。倫敦では猶々少ない、少ないが此留学費全体を投じて衣食住の方へ廻せば我輩と雖も最少しは樂な生活が出来るのさ。夫は固に居る時分の体面を保つ事は覚束ないが（国に居れば高等官一等から五ツ下へ勘定すれば直ぐ僕の番へ巡はつてくるのだからね。尤も下から勘定すれば四つで来て仕舞うんだから日本でも余り威張れないが）兎に角是よりも薩張りした家へ這入れる。然るにあらゆる節儉をして斯様なわびしい住居として居るのはね、一つは自分が日本に居つた時の自分ではない単に学生であると云ふ感じが強いのと二つ目には切角西洋へ来たもの

漱石はなぜ「倫敦消息」を書き直したのか

だから成る事なら一冊でも余慶専門上の書物を買つて帰程度慾があるからさ。そこで家を持つて下種共を召し使つた事は忘れて只十年前大学の寄宿舎で雪駄のカ、トの様な「ビステキ」を食つた昔しを考へては夫よりも少しは結構？先づ結構だと思つて居るのさ。人は「カムバーウエル」の様な貧乏町にくすぶつてると云つて笑うかも知れないがそんな事に頓着する必要はない。斯様な陋巷に居つたつて引張り近づきになつた事もなし夜鷹と話をした事もない。心の底迄は受合はないが先拳動丈は君子のやるべき事をやつて居るんだ。実に立派なものだと自ら慰めて居る。

（傍線は引用者による）

『色鳥』版

僕の下宿の体裁は前便に申述べた通り頗る憐れつぽいものだが、さういふ心細い所に、三十代の顔子のやうな気持で、能く澄ましてゐられたものだと君は不審を起すかも知れないが、僕とても御存じの如き俗物である以上、斯んな窮窟な活計をして回や其樂を改めず賢なるかなと賞められやうなどとは無論思つてゐない。たゞ已を得ないので厭々ながら辛抱してゐるのだとさへ推察して貰へばそれで沢山だ。

僕だつて留学生の学資全体を衣食住の方へ廻せば、いくら物価の高い倫敦でももう少し樂な生活は出来るのだが、自分はまた昔し通りの書生に立ち返つたのだといふ感じが強く起ると、折角西洋へ来たものだから成らう事なら一冊でも余計専門上の書物を買つて帰りたいといふ慾望が僕を高圧的に支配するので、少しの不自由は我慢しなければならぬといふ氣になるのだと思つて呉れ給へ。十年前大学の寄宿舎で雪駄の踵のやうな堅いビステキを食つた経験のある僕は苦しくなるとあの時分の事を回想して一人で一人を慰めてゐる。

おおまかではあるが、『色鳥』版では残されていない部分を傍線で示してみた。両者とも、「憐れつぽい」下宿に辛抱している心情を理由ともども伝えて点では、内容そのものに大差はない。そして、これを下宿経営者一

家との転居、という出来事を描く一人称の話として捉えるならば、『色鳥』版は冒頭に前提となる状況を示すと言う点で、書き出しとしてよく機能していると言えるだろう。この直後に下宿の具体的な描写が与えられることによって叙述の焦点化はさらに進む。その方向性は明らかである。

一方、『ホトトギス』版の語りは決して一直線には進まない。もちろん新たな書簡の冒頭であったのだから、宛先人である子規および虚子に対して直接の呼びかけがなされているのはむしろ当然であり、『色鳥』版でもそれは「さういふ心細い所に、三十代の顔子のやうな気持で、能く澄ましてゐられたものだと君は不審を起すかも知れないが」などという部分に残されている。しかし、『ホトトギス』版の漱石はそれだけでは満足できず「聞かなくつても聞く事にはしないと此方が都合だから先づ聞くと認める、処で我輩が君等に答へるんだ懸価のない所を答へるんだから其積りで聞かなくつては行けない」とまるで絡むかのように相手の聞き方（読み方）にまで口を出す。もしこれが何か「物語」を伝えるものとして書かれたものならば、これはその伝達を妨げる余計な脱線と言うべきものだろう。また物語論ならば、子規に対して「其積りで聞かなくつては行けない」と指示するような言説は、物語内世界から逸脱してその外側、メタ物語世界に位置する語りと位置付けるかもしれない。

しかし、全面削除された「一」がそうであったように、この「ホトトギス」版「二」の冒頭についてその言説を「物語内世界」と「メタ物語世界」に分けることは、第一に不可能であるし、第二に無意味である。そもそもここにはテキストを内側と外側に色分けできるような「物語」そのものが存在しないのだ。真水と海水の入り混じる汽水域のようなこの冒頭部では、語り手漱石の意識は、メッセージである「物語」よりも書簡というメディアの機構に向けられており、聞き手（読み手）である子規の存在と自分の言葉が子規に引き起こすであろう反応に囚われている。たとえば、続けて第二段落のはじめを改めて見るならば、まず自分の語りについて「我輩も時には禅坊主見た様な変哲学者の様な悟り済した事も云つて見るが」と自意識的に言及して見せたあとで「そんならなせもつと愉快な所へ移らないかと云ふかも知れない

が其処に大に理由の存するあり焉さ」と聞き手の問い返しを先取りして自らの語りに取り込み、「先聞き給へ」と指示を出している。書き手である漱石はここであなたも読み手と対座しているように語っているのだから、語る内容も、また「ね」や「さ」という終助詞にいたる語りのトーンやアクセントまで、すべて言葉の向こう側にいる二人の友人の存在によって濃く彩られているのだ。ミハイル・バフチンの言うとおり、「表現は、発話の当該の出来事の参加者によって規定される」のであり、「これら参加者の相互関係こそが発話を形成し、ほかならぬまさにこうあるべき発話をひびかせる」のである。

漱石が『色鳥』版において排除したのは、まさにこの「参加者の相互関係」が形成するような発話であり、そのひびきであった。長島裕子はそれを指して「初稿では「私信」であったがゆえに成り立っていた読み手と書き手との暗黙の了解、いわば仲間うち意識がそぎ落とされている」と明快に指摘しているが、この「そぎ落と」しは、『色鳥』版を通じて徹底されている。たとえば下宿屋の「神さん」の妹から一緒に引越すことを頼まれるくだりを両版で比べてみよう。

「ホトトギス」版

或日亭主と神さんが出て行つて我輩と妹が差し向ひで食事をして居ると陰気な声で「あなたも一所に引越して下さいませか」といつた此「下さいませか」が色気のある小説的「下さいませか」ではない。色沢気拔きの世帯染た「下さいませか」である、我輩が此語を聞たときは非常にいやな可愛想な気持ちをした、元来我輩は江戸っ児だ。然るに朱引内か朱引外か少々曖昧な所で生れた精か知らん今迄江戸っ児のやる様な心持ちのいゝ慈善的職業をやつた事がない。今何と答をしたか慥かに覚えて居らん。苟も一遍の義侠心があるならばうんあなたの移る処ならどこでも移りませと答へる筈なのだ。さうは答へなかつたらしい。茲にさう答へられない訳がある。成程此妹は極内気な大人しい而も非常に堅固な宗教家で我輩は此女と家を共にするのは毫も不愉快を感じないが姉の方た

るや少々御転だ。

『色鳥』版

或日亭主と上さんが出て行つた後、僕は妹と差向ひでたつた二人午飯の食卓に就いた。

「貴方も一所に引越して下さいませか」

妹は陰気な声で僕に哀願するやうに頼んだ。僕は可哀想だけれども一種厭な心持がした。然し気の毒といふ感じは充分あつたので、成らう事なら一所に移つてやらうと思はないでもなかつたが、一方では又さう向ふの云ふ通りにばかりなつては居られない訳も有つてゐた。

此妹は極内気で大人しくて其上に信心の堅固な女だから、一所にゐても少しの不愉快を感じないが、姉の方になると何うも左右は行かない。

『色鳥』版を書きななおそうとする漱石にとつて、記述される出来事も自身の感情も、十四年前のことからである。それに対して「ホトトギス」版で語られるのは同じ出来事であつてもせいぜい一週間前のことであり、語られる感情も現在の漱石の感情と地続きになつていて、まだ揺れを残しながら現在の感情の一部に紛れ込んでゐる。しかも漱石は、その新たな出来事と定まらない感情を、先に述べたように、聞き手という対座する他者への意識にひきずられながら語る。下宿屋の神さんの「妹」から「あなたも一所に引越して下さいませか」と言われた事実を伝えながら、それが聞き手に引き起こすであろう反応（冷やかし？）を予想してすぐそれが「色鳥のある小説的のもの」ではなく「色沢気（つやけ）抜き世帯染た」口調でなされたものであることをつけ加えずにはいられない。また逆に、つい最近に起きたことながらでありながら「今なんと答をしたか慥かに覚えて居らん」と言い「さうは答へなかつたらしい」と不確かな口ぶりで語るのには、単純な義侠心を發揮できない自身の感情の屈折や揺れを一種の韜晦のうちに伝えようとするためである。その前提となつてゐるのは、そのような韜晦や高度な修辭を理解してくるであろうという「読み手と書き手との暗黙の了解」であり、また「仲間

うち意識」だろう。これに対して、『色鳥』版では、同じ感情が「僕は可哀想だけれども一種厭な心持がした。然し気の毒といふ感じは充分あつたので」と簡潔に語られる。この時、漱石の描こうとする感情は、とうの昔に動きを止めて、はるか遠くから眺められた感情であり、それを語ろうとする言葉は、特定の参加者との相互関係から離れた言葉であつた。もちろん、『色鳥』版を書きなおす時の漱石の意識から「他者」そのものが失われていたと言わない。むしろ漱石は、このとき、別の他者に向かつて、別の関係性において語り直そうとしていたのである。

四、書簡の読み手と小説の読者

小宮豊隆の「解説」に戻るならば、もちろん小宮も漱石が『色鳥』版において削除したものが子規や虚子との「暗黙の了解」や「仲間うち意識」の表出であり露頭部分であることを確認したうえで、あるいは確認したからこそ、それらを「軽薄に見え厭味に見えるもの」と評したのである。確かに「二」に顕著な読み手への直接的な語りかけには当然ながら軽口めいた調子もあり、「其積りで聞かなくつては行けない」と敢えて居丈高に指示して見せるような戯れなどは、親密な両者の関係の外側から見ればあるいは厭味を感じさせるものかもしれない。またこれも小宮が指摘しているように、漱石と子規、虚子という「参加者の相互関係」が語り手の言葉にもたらす響きこそがその語りに「生彩」を与えていることも疑えない。森田草平はそれを「公衆を眼前に置かない作物の価値」と呼んだ。

問題は小宮が、あたかも漱石自身が若書きを恥じているかのように捉えて「ホトトギス」版を「苟もそれを公けにする以上は、現在の眼から見て、我慢が出来る程度のもの」に変えたと推測している点にある。もちろん、『色鳥』への「倫敦消息」収録を編集者から打診されて、漱石が「公」を意識しなかつたとは言わない。しかし単なる削除に留まらず、全面的な語り直しにまで及ぶ漱石の改稿を見るならば、その動機が「軽薄に見え厭味に見えるもの」を単に削り落とすというような弥縫的なものに留まっていたとは思われない。むしろ漱石にとって「公」の意識は、軽薄や厭味を恐れるという「徳

義上」の適切性ではなく、『色鳥』版で眼前に置かざるを得ない「公衆」、つまり読者への「芸術上の」配慮となつて動機を形成し、その結果「小説化」がなされたと考えることはできないだろうか。

たとえば、「ホトトギス」版では、下宿経営者一家が語り手に話す言葉は、鍵括弧に入れられながらもそのまま改行なく語りの中に含まれるが、『色鳥』版においてはかならず改行されて独立した位置を与えられる。この差異が読む者に与える効果は明らかで、「ホトトギス」版においては、下宿屋一家や「下女」ペンの話す言葉も語り手の声を通して聞かされることになる。括弧に入れられているのだから話法上は直接話法だろうが、よどみなく続く語りの中でそれらはむしろ間接話法に近く、親密な読者との空間においては語り手漱石の「声色」として聞こえてくるだろう。これに対して、『色鳥』版では、独立した位置を与えられたことよつてその言葉は独自の声を響かせる。まさしく「小説的」な登場人物の発言として語り手である「僕」の言葉とは差異化されているのである。

また語り手の自称にしても「ホトトギス」版では「僕」と「吾輩」の二通り用いられていたものが、『色鳥』版では「僕」に統一される。この「吾輩」の使用は、『倫敦消息』と『吾輩は猫である』の連続性を論じるうえで非常に重要な意味を持つが、『倫敦消息』のみを見るならば、「ホトトギス」版においてそれが当初「僕」と混用されていた、という事実注目しなければならぬ。「一」において「僕」として始まった自称が日記体の部分では「吾輩」に代わり、それが終わった末尾でまた「僕」に戻るの、語る自己と語られる対象たる自己の分離を示すものだろうが、同時に子規や虚子という友人たちに対して敢えて自己を物語るという含羞が逆にやや非日常的な響きのある自称を選ばせたものだと取ることもできる。「二」以降において自称がすべて「我輩」に統一されるのも、このような「参加者の相互関係」に促された自己劇化が語られる自己だけではなく、「語る自己」にまで及んだ結果ではないだろうか。

『色鳥』版の語り手が「ホトトギス」版の語り手ともっとも異なるのは、このような自己劇化を必要とするような関係性を読み手との間に持ちえない

かつたことにある。先に引いたように、森田草平は「ホトトギス」版に「公衆を眼前に置かない作物の価値」を見出したが、一九一五年の漱石は『色鳥』への「倫敦消息」収録を求められたとき、同じ作物についてもはや「公衆を眼前に置かない」ことなどできない事実で改めて気づかされたはずである。

そしてその自覚は同時に、あの三通の書簡に綴つた言葉を支配していた「参加者の相互関係」がもう永遠に失われているという思いにも結び付いただろう。書簡としての「ホトトギス」版は、当然のことながら決して一般的な読者を想定して書かれたものではない。正しく反対に、それは子規と虚子というごく限られた読み手に向けて「子規の病気を慰めんが為に」という明確な目的のもとに書かれた文章である。そのうえで、「昔カラ西洋ヲ見タガツテ居タ」にも拘わらず果たせないまま死を迎えつつある子規に対して、その西洋での生活を語つて慰めようとするとき、漱石の言葉には細心の配慮が払われ、それが自己の諧謔化や身振りだけの虚勢、失敗を見越した弁明や読み手へのからかいなどといった実に様々な修辭の彩りをもたらしつつあった。

しかし、そのようなレトリックを必要とする読み手はもはやいない。漱石が『色鳥』版ですべての文章を書き直したのも、また「我輩」に代わつて「僕」という単一の自称を採用したのも、極めて修辭的な語りを己から引出してくるような、また同時にその語りの最良の享受者となつてくれるような「書簡の読み手」を喪失したという痛切な自覚によるものではないだろうか。

前述の論文で久泉は二つのヴァージョンの間にある十四年間の時間的な差異を、作者漱石の創作意識の側からとらえ、その間に「文学的な自己発見」を経た小説家としての「漱石には、「ホトトギス」版が「なんら明確な構造をもたないことは大きな欠点と感じられた」として『色鳥』版における小説化を説明している。そのうえで久泉は「ホトトギス」版における末尾の一文、「我輩は子規の病気を慰めんが為に此日記をかきつゝある」が、『色鳥』版では「さうして僕は君の病気を慰めるために此手紙を認めつゝある」へと変えられ、子規という「特定のあて名がなくなつた」ことに象徴的な意味合いを見出している¹⁹。鋭い着眼だが、しかしこれを読者の変化、正確には漱石の読者に対する意識の変化の表れとして見ることもできるだろう。十四年を経

て、漱石は「なんら明確な構造をもたない」ことよって「ホトトギス」版の「大きな欠点」と感じてしまうような読者を眼前に置いているのだ。「ホトトギス」版から『色鳥』版への語り直しは、「我輩」と「子規」という固有の関係を失った漱石が、「僕」と「君」というはるかに一般的な、しかし漱石にとつてはもはや逃れることのできない「参加者の相互関係」を前提とした再話への試みに他ならない。「小説化」はその必然的な結果であった。

注

漱石の文章はすべて岩波新版「漱石全集」(一九九三―五)に拠る。『倫敦消息』は「ホトトギス」所収版、『色鳥』所収版ともに、第十二巻に収められている。

(1) 「ホトトギス」掲載にあたっては、四月九日付書簡の冒頭と結尾および四月二十日付の結尾が削られたが、いずれの部分も全集には書簡として収められている(岩波新版全集第二十二巻)

(2) 一九一七年九月二十一日「東京朝日新聞」一面、夏目漱石全集予約募集広告より

(3) 小宮豊隆『漱石の芸術』(岩波書店、一九四二年十二月)

(4) 漱石全集十二巻解説

(5) 『色鳥』(新潮社、一九一五年九月)

(6) 改稿の理由について直接言及しているものには、岡田英雄「作家の添削―漱石の『倫敦消息』について―」(『言語生活』一六三、一九六五年)、久泉伸世「ふたつの『倫敦消息』と『自救的動産差し押さえ』」(『専修人文論集』四九、一九九二年)、宮澤賢治「『倫敦消息』をめぐって」(『白百合女子大学研究紀要』三二、一九九五年)。岡田論文は後注で、久泉論文は本文で言及。宮澤論文は『色鳥』版が「単刀直入のストーリーをつたえる文章に変わってしまった」と述べたうえで、「ホトトギス」版「倫敦消息」を「猫」に結実してゆく一つの試金石」と捉えてそこに「ひねった文章への錬成の努力過程」を見ている。本稿の範囲を超えるが、「ホトトギス」版における語り手と読者の親密な関係とそれが可能にした転説法的な言説は、明らかに「猫」まで引き継がれていると思われる。また長島裕子は「ほととぎす」の日記募集と漱石の「倫敦消息」について(『近代文学 研究と資料』第六集、昭和五十三年、早稲田大学大学院文学研究科紅野研究室)において「両者の異同を逐一見ていくことで明らかになる問題がある」として比較の必要性を示唆しているが、論考の主眼は、「倫敦消息」を「ホトトギス」における同時期の「日記募集」との関連においてとらえることにあった。長島は「倫敦消息」と「猫」との間の連続性、類似性を論ずることには慎重であるが、「自己に面白き事」と「他人に面白き事」との間」をどのように埋めていくか、という問題意識に「作家漱石の

誕生とその足取りを辿る一つの手掛かりがある」とする指摘は、本稿において「ホトトギス」版の親密な書簡の読者と『色鳥』版の広く一般的な小説の読者、という対比を考えるうえで、大きな示唆を与えてくれた。本稿では十分に取り上げることができなかったが、別に論じる機会を待ちたい。

(7) 森田草平『文章道と漱石先生』(春陽堂、一九一九年十一月)

(8) 岡田英雄も前掲論文において、『色鳥』版に再録する場合は「高名な作家漱石の作品」として読者がそれに対することを漱石も意識し、その作家意識から「軽薄にも厭味にも感じられ」るものを削った、という見方を示している。読者層の変化を意識したことが漱石の改稿を促した点は全く同意するが、その動機に「高名な作家」という社会的な自意識が働いたとは筆者は考えない。後述するように、漱石を削除に向かわせたのは「ホトトギス」版で自らの言説の有り様を決定した「書簡の読者」との親密な関係性がもはや得られないという自覚である。

(9) ただし、「ホトトギス」初出においては「一」という章番号も付されなかった。

(10) 佐藤泰正他『シンポジウム日本文学14 夏目漱石』(学生社、一九七五年十一月)、長島裕子、注(6)参照。

(11) 長島、前掲論文

(12) 石崎等「初期の文章『倫敦消息』の位置をめぐって」(『夏目漱石必携Ⅱ 別冊国文学No.14』、學燈社、一九八二年五月)

(13) 久泉伸世、注(6)参照。

(14) このように相手の反応を先取りして述べ、それに返答し、かつ命令までするという語り手と聞き手のメタ物語的な言説がテキストの一部をなすという手法は、そのまま「吾輩は猫である」の中でも用いられている。以下、「八」から典型的な例を挙げる。

吾輩は既に小事件を叙しおわり、今また大事件を述べおわつたから、これより大事件の後に起る余瀾を描き出だして、全編の結びを付けるつもりである。凡て吾輩のかく事は、口から出任せのいい加減と思う読者もあるかも知れないが決してそんな軽率な猫ではない。一字一句の裏に宇宙の一大哲理を包含するは無論の事、その一字一句が層々連続すると首尾相応じ前後相照らして、瑣談織話と思つてうつつかりと読んでいたものが忽然豹変して容易ならざる法語となるんだから、決して寝ころんだり、足を出して五行ごと一度に読むのだなどという無礼を演じてはいけない。柳宗元は韓退之の文を読むごとに薔薇の水で手を清めたという位だから、吾輩の文に対してもせめて自腹で雑誌を買つて来て、友人の御余りを借りて間に合わすという不始末だけはない事に致したい。これから述べるのは、吾輩自ら余瀾と号するのだけれど、余瀾ならどうせつまらんに極つては、読まんでもよかるうなどと思つと飛んだ後悔をする。是非しま

(15) ミハイル・パフチン「芸術のことばの文体論1(言語とはなにか) 桑野隆・小

(漱石全集 第一巻)

漱石はなぜ「倫敦消息」を書き直したのか

- (16) 林潔編訳『パフチン言語論入門』（せりか書房、二〇〇二年八月）
長島、前掲論文
- (17) 注(10)に示したものの他、相原和邦「作家の誕生」(『国文学解釈と鑑賞』一九七九年六月)がこの点に論究している。
- (18) 「序」『吾輩ハ猫デアル』中編自序」中に漱石が引用している子規の書簡中の言葉(新版『漱石全集』第十六卷、岩波書店、一九九五年四月、三三三頁)
- (19) 久泉、前掲論文

Why did Natsume Sōseki rewrite *Rondon Shosoku* (*Letters from London*)?

Fumihito ANDO

Abstract

Two versions of Natsume Sōseki's *Rondon Shosoku* (*Letters from London*) exist. The original was published in 1901 in two issues of *Hototogisu*, a magazine edited by Masaoka Shiki and Takahama Kyoshi, whom the letters were sent to and who were Sōseki's close friends. In 1915, it appeared in an anthology, *Irodori*, but Sōseki rewrote the text so completely that only a few sentences remained unaltered. Significantly, this is the only case of rewriting by Sōseki in his literary career, and he has not offered any comment or explanation for it. This paper speculates on why Sōseki's rewriting of *Rondon Shosoku* by focusing on the dialogical text features in the original version and its alteration to a more "novelistic" form in the second version.

In one of the commentaries to Sōseki's complete works, Komiya Toyotaka, a protégé of Sōseki, conjectured that Sōseki, having reread *Rondon Shosoku* fourteen years after it was first published, found it left too "frivolous and cozy" an impression on him. Thus, he removed the book's entire first section and the dialogical parts in the other two sections in an attempt to make it more appealing to contemporary readers. However, this reasoning, made from a moral point of view, is not based on facts such as the retrospective Sōseki conducted on his work but possibly on Komiya's own critical views on one of his adoring mentor's earliest works.

This paper, in considering the transition among the target readers of the two versions—from Shiki and Kyoshi to general readers—concludes that Sōseki's bitter awareness of losing the intimate relationship with his ideal readers that made possible the original book's highly rhetorical text urged Sōseki to attempt a shift in genres by retooling his narrative from the sentence level.